

九州シンクロトロン光研究センター 県有ビームライン利用報告書

課題番号：1207065L

BL番号：09A

(様式第5号)

シンクロトロン光を用いた効率的な突然変異育種法の開発と実用形質を有する
スプレーギクの育成

Development of mutation breeding using synchrotron light and production of
spray-type chrysanthemum.

坂本 健一郎 西 美友紀 高取 由佳 千綿 龍志 大藪 榮興
Kenichiro Sakamoto Miyuki Nishi Yuka Takatori Ryushi Chiwata Eikou Oyabu

佐賀県農業試験研究センター
Saga prefectural agriculture research center

- ※1 先端創生利用(長期タイプ、長期トライアルユース)課題は、実施課題名の末尾に期を表す(I)、(II)、(III)を追記して下さい。
- ※2 利用情報の開示が必要な課題は、本利用報告書とは別に利用年度終了後二年以内に研究成果公開{論文(査読付)の発表又は研究センターの研究成果公報で公表}が必要です。(トライアルユースを除く)

1. 概要

本研究では、スプレーギクにおいてシンクロトロン光を用いた実用的形質を有する系統の作出を目的として、吸収線量が生存に及ぼす影響について調査した。

その結果、‘佐賀 SK3 号’における変異誘発に有効な吸収線量は 40~60Gy であると考えられた。

In this study, we have investigated that synchrotron lights can be employed to induce mutation. To produce strains having commercial traits in spray-type chrysanthemum, we investigated the effects of level of radiation on survival of the irradiated buds.

As a result, we considered that it is effective when irradiated with 40-60Gy of synchrotron lights in ‘Saga SK-3’.

2. 背景と目的

突然変異育種は、有用な遺伝資源を得るための育種法の1つであり、農作物の品種開発において一部形質の改良等に利用されている。中でも量子ビームによる突然変異育種法は、誘発される変異の幅が非常に広く、これまでにない新規の形質も得られることから、活発な研究開発が行われている。

こうした中、シンクロトロン光も量子ビームの一種であり、植物の突然変異育種に利用できる可能性が示唆されることから、農作物における突然変異誘発の可能性等を検討し、新品種開発分野におけるシンクロトロン光の新たな活用の方向を明らかにする。

これまでの試験により、輪ギクにおけるシンクロトロン光照射による、変異誘発に有効な吸収線量は10~20Gyであることが明らかとなり、本県育成系統の‘佐賀1号’に照射した場合において、花色の濃淡化や花型変異が確認されている。

そこで、本試験では輪ギクに加え、本県育成のスプレーギクにおいて、シンクロトロン光を照射し、変異誘発に有効な吸収線量を検討するとともに、花色等において実用的な変異形質を有する系統の作出を試みる。

3. 実験内容（試料、実験方法、解析方法の説明）

【実験1】スプレーギク品種‘佐賀SK3号’における吸収線量の検討

- 1) 供試品種：スプレーギク品種‘佐賀SK3号’
- 2) 照射材料：挿穂の頂芽
- 3) ビームライン：LS-09A
- 4) 吸収線量：0Gy（対照区）、10Gy、20Gy、40Gy、60Gy
- 5) 供試数：0Gy 40本（対照区）、10Gy 160本、20Gy 164本、40Gy140本、60Gy141本
- 6) 調査項目：照射6週間後（親株床への定植時）および照射12週間後（採穂前）の生存率、開花時における花色変異等の調査
- 7) 実験方法：
 1. キク親株から採穂後、展開葉を除去し、頂芽から約6cmの長さに穂を調整
 2. 調整した穂15～20本程度を湿らせた新聞紙でくるみ、円柱形のプラスチックケースに入れる（図1）
 3. 固定台に穂を詰めたプラスチックケースを固定
 4. 処理区ごとに試料にシンクロトロン光を照射
 5. 処理後の穂を挿芽し、本圃へ定植までミスト灌水で管理
 6. 発根後、親株床に定植
 7. 定植後に伸長した穂を2～3回摘心し、その後伸長したシュートを採穂後、挿芽
 8. 発根後、本圃へ定植（最低温度13℃で栽培）



図1. 照射用のキク穂

【実験2】スプレーギクおよび輪ギクにおける有用形質を有する変異体獲得

- 1) 供試品種・系統：
 - スプレーギク4品種：‘佐賀SK1号’、‘佐賀SK2号’、‘佐賀SK4号’、‘佐賀SK5号’
 - 輪ギク系統：‘神馬2号M選抜’（‘神馬2号’の現地選抜系統）
- 2) 照射材料：実験1と同様
- 3) ビームライン：実験1と同様
- 4) 吸収線量：0Gy（対照区）、10Gy、20Gy
- 5) 供試数
 - スプレーギク
 - ・‘佐賀SK1号’ → 0Gy 17本（対照区）、10Gy 140本、20Gy 150本
 - ・‘佐賀SK2号’ → 0Gy 17本（対照区）、10Gy120本、20Gy 119本
 - ・‘佐賀SK4号’ → 0Gy 17本（対照区）、10Gy 134本、20Gy 132本
 - ・‘佐賀SK5号’ → 0Gy 17本（対照区）、10Gy 137本、20Gy 125本
 - 輪ギク系統‘神馬2号M選抜’ → 0Gy 20本（対照区）、10Gy 121本、20Gy 120本

6) 調査項目：

- スプレーギク：開花時における花色変異等の調査
- 輪ギク：無側枝性および開花時における花色変異等の調査

7) 実験方法：実験1と同様

4. 実験結果と考察

【実験1】

スプレーギク品種‘佐賀 SK3 号’における照射 12 週間後（採穂前）の生存率を図 2 に示す。対照区では全て生存しており、シンクロトロン光を照射した区では、10Gy 区で 99.4%、20Gy 区で 98.2%、となり照射したほとんどの穂が生存していた。また、40Gy 区では 78.6%、60Gy 区で 47.5%となり、吸収線量が高くなるにつれて生存率が低下し、線量反応曲線の肩付近から生存率が半減する線量（LD₅₀）が、変異誘発の最適線量であることを考慮すると 40～60Gy が有効であると考えられた。

第 1 期の照射試験において、LD₅₀を検討したところ、‘佐賀 SK1 号’、‘佐賀 SK2 号’、‘佐賀 SK4 号’および‘佐賀 SK5 号’では 20～40Gy であったが、‘佐賀 SK3 号’については、本試験と同様に LD₅₀ が 40～60Gy であった。

以上の結果から、‘佐賀 SK3 号’においては、変異誘発に有効な吸収線量は 40～60Gy であり、他の 4 品種よりもやや高い吸収線量が有効であると示唆された。現在、得られた系統を本圃に定植し、3 月開花作型で栽培を行っている。

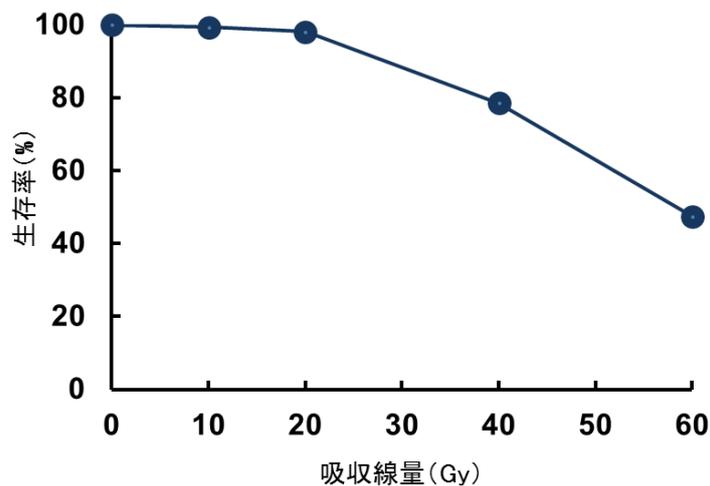


図 2. スプレーギク ‘佐賀 SK3 号’ における吸収線量が照射 12 週間後の生存率に及ぼす影響

【実験2】

スプレーギク品種 ‘佐賀 SK1 号’、‘佐賀 SK2 号’、‘佐賀 SK4 号’ および ‘佐賀 SK5 号’ については、吸収線量 10～20Gy のシンクロトロン光を照射し、現在、得られた系統を本圃に定植し、3 月開花作型で栽培を行っている。

輪ギクについては、これまでの試験により変異誘発に有効な吸収線量であった 10～20Gy のシンクロトロン光を照射し、現在、得られた系統を本圃に定植し、4 月開花作型で栽培を行っている。

5. 今後の課題

スプレーギク 5 品種については、3 開花作型において、花色等の変異の有無を調査し、有用な変異体の選抜を行う予定である。

また、輪ギク系統 ‘神馬 2 号 M 選抜’ については、4 月開花作型において花色変異および無側枝性等の有無を調査し、有用な変異体の選抜を行う予定である。

6. 参考文献

7. 論文発表・特許（注：本課題に関連するこれまでの代表的な成果）

8. キーワード（注：試料及び実験方法を特定する用語を2～3）

- ・突然変異：偶発的または人為的に DNA 塩基配列が変化すること。
- ・Gy（グレイ）：放射線のエネルギーがどれだけ物質に吸収されたかを表す単位。

9. 研究成果公開について（注：※2に記載した研究成果の公開について①と②のうち該当しない方を消して下さい。また、論文（査読付）発表と研究センターへの報告、または研究成果公報への原稿提出時期を記入して下さい（2012年度実施課題は2014年度末が期限となります。）

① 論文（査読付）発表の報告

（報告時期： 年 月）

② 研究成果公報の原稿提出

（提出時期： 年 月）